開催地名：岡山県倉敷市	
開催日時	令和 3 年 10 月 12 日（火）　13:40～15:10
開催場所	倉敷市立黒崎中学校　体育館
語り部	武蔵野美和　　（岩手県陸前高田市）
参加者	生徒・教職員　約 100 名
開催経緯	・学校周辺が土砂災害警戒区域であり、また海岸沿いのために津波の危険性もある。そのため、各自がより防災意識を高くもつ必要がある。 ・地域住民は高齢者が多く、低年齢層が少ない。低年齢層が果たすべき役割が大きいことの意識付けが必要である。
内容	（1）震災発生時の陸前高田市について 私が住んでいるのは、岩手県陸前高田市という、人口でいえば 2 万 4000 人ほどの小さな市である。海岸沿いに面した部分が少なく、市の中心に大きな川が通っている。かつて川から中州が生まれ、そうして出来た平野に人が住み始めたことで栄えた歴史があり、震災時は川の近くに市役所・学校といった主要な建物や住宅が集中していた。 市内には災害について学べる防災センターがあった。また過去の津波記録なども残されていたが、災害防止に繋がる対策は講じられていなかった。 （2）東日本大震災時の状況 地震発生から 40 分ほど経った頃、気仙川を火事のような煙と砂埃を上げながら津波が遡り、市全体を襲った。津波の高さは高田第一中学校で 15.5 m、市民体育館で 15.8m、県立高田高校では 17.6m を記録。市役所や消防署などの公共施設は全壊。線路の橋げたが飴のように捻じ曲げられ、2ｋｍ先まで流されたほどの威力だった。 川の近くに建物が集中していたことから、多くの市民が建物を片づけている最中に津波に遭遇。津波を予測し真っ先に高台や建物の屋上へ逃げた者は難を逃れた。しかし津波が来ることに気づけなかった者や、地震に耐えられた建物を見て油断した者、市民体育館や防災センターを避難所と勘違いし逃げ込んでしまった者も多く、正しい情報が浸透していなかったことで被害が拡大した。 当時私は陸前高田市立中学校で生徒の送迎に来た保護者の対応をしていたが、川沿いの施設に勤めていた保護者は送迎が困難な状況であった。その後中学校は市内で一番大きな避難所として市民を迎え入れた。赤十字や自衛隊が支援本部を構え、校庭には仮設住宅が作られ、多い時で 1500 名の

	市民が避難生活を送った。しかし、学校の再開が困難な状況となってしまった。 （3）生徒たちの姿と、災害状況から得た教訓 　不自由な避難生活を助けたのは、学びの場を失った中学校の生徒たちだった。彼らは「学校生活が送れない代わりに自分たちがここで出来ること」を考え、壁新聞や掲示板を作り日々の情報を発信した。さらに清掃・子供たちの遊び相手・動けない者の御用聞きなども率先して行い、避難所で過ごす多くの人を励ました。 　この経験を通して、私は 1 人ひとりが「災害が起きたらどう動くか」ということを常に考える意識が必要だと強く感じた。住んでいる場所や置かれている状況を見て、どう避難するのが安全か考える。また自宅が安全である場合には、備蓄を十分に準備する。ハンデのある人や意思の疎通が難しい人にどう避難経路や危険を伝えるか想定する。人によって最適な避難方法・できることは違うのだから、【「自分はこうやる」という心意気が（災害発生時の安全な非難に備える）0 次避難につながる】ということを覚えていただきたい。
開催地より	陸前高田市立中学校では今回の災害を振り返り、防災計画作りや避難所運営をシミュレートできるゲームの立案など、土地の知識と経験を活かした様々な取り組みを行った。今後は中学校だけでなく市全体でも防災意識を深めることは必須。教える人・教わる人の絆を作り、防災の知識を地域で身に着けられる取り組みを進めていきたい。